

専門用語研究 No.8 サプリメント

大塚明郎会長を偲ぶ

1994年10月

専門用語研究会
Japan Terminology Association

目 次

大塚明郎氏略年譜	1
追悼録	3
大塚明郎先生と学術用語の制定・普及	青戸 邦夫 4
大器大塚会長を偲ぶ	川島 勝 6
大塚先生とローマ字表記	太田 泰弘 7
OWAKARE NO KOTOBA	Sibata Takesi 8
大塚先生を偲んで	田中 康仁 11
ポラニーとの出逢い	仲本秀四郎 13
大塚先生を悼む	長山 泰介 14



大塚明郎氏略年譜

- 1899(明治32)年 4月15日 東京府板橋村に生れる。父周太郎，母なほ。
- 1911(明治44)年 県立栃木中学に入学。一年生の夏，四国善通寺にひとり旅し，四年生の夏には，元山まで旅行する。
- 1916(大正5)年 9月 第二高等学校(現・東北大学)に入学。保証人は土井晩翠だった。
- 1919(大正8)年 東京帝国大学理学部に入学。長岡半太郎，田丸卓郎，寺田寅彦に師事。また日本のローマ字社・社友となって，田中館愛橘，土岐善麿，池野成一郎などについて“ローマ字運動”にたずさわる。
- 1923(大正12)年 第八高等学校教授。
- 1924(大正13)年 明治専門学校(現・九州工業大学)教授。
- 1927(昭和2)年 カイザー・ウィルム・ヘルム研究所(現・マックスプランク研究所)に在籍。ポラニー Michael Polanyi のもとで研究。オットー・ハーン Otto Hahn，マイトナー H. Lise Meitner，ペラン Jean Baptiste Perrin，ディラック Paul Adrien Maurice Dirac などと会う。
- また当時のベルリン大学には，プランク Max Karl Ernst Ludwig Planck，シュレディンガー Erwin Schrödinger，ネルンスト Walther Hermann Nernst，アインシュタイン Albert Einstein などがいて，その輪講に陪席。
- 帰国の途上ハンブルグ，コペンハーゲン，レニングラード，フィンランド，スウェーデン，アムステルダムを訪れ，イギリス，アメリカを廻って帰国する。ニールス・ボーア Niels Henrik David Bohr と会う。このほか，シュテルン Otto Stern，ジークバーン Siegbann，ゼーマン Pieter Zeeman，アストン Aston，ブラケット Blacket，コンプトン A. H. Compton などの Nobel 賞受賞者に会った。
- 1932(昭和7)年 理学博士(東京帝国大学)となる。
- 1941(昭和16)年 京城大学教授。
- 1944(昭和19)年 京城帝国大学理工学部長。
- 1950(昭和25)年 理科教育審議会長。
- 1952(昭和27)年 文部省国語審議会委員。
- 1953(昭和28)年 東京教育大学光学研究所教授(朝永振一郎とともに)。日本分光学会長。
- 1956(昭和31)年 東京教育大学光学研究所長。8～11月シュツットガルト国際ドキュメンテーション連盟(FID)会議に出席，ドンカー・デュイビス Donker Duibis に会う。スイスでシェーラー Scherer に会う。
- 1957(昭和32)年 学術奨励審議会委員。パリのFID会議に出席，フランス国立図書館長カイン Cain に会う。
- 1958(昭和33)年 ワシントンのFID会議に出席，アドキンソン Adkinson に会う。
- 1959(昭和34)年 国際ドキュメンテーション連盟(FID)副会長。ポーランドで開かれたFID会議に出席。
- 1960(昭和35)年 7～9月リオデジャネイロのFID会議に出席。帰国の途上，会員国デンマーク，スウェーデン，イギリス，フランス，スイス，ポルトガル，アメリカ，カナダを訪れ，関係者と会う。

- 1961(昭和36)年 8～10月ホノルルの太平洋学術会議およびロンドンのFID総会に出席。同時に会員国アメリカ、スウェーデン、デンマークを訪れ、ホノルルでは日本の情報を報告。
- 1962(昭和37)年 9～10月ハーグのFID会議に出席。同時に会員国フランス、ベルギー、チェコスロバキア、オーストリア、ハンガリー、ソビエト、イギリス、アメリカを訪れ、関係者と会う。
- 1963(昭和38)年 光研退職。科学技術館長。ストックホルムおよびワシントンのFID会議に出席。
- 1964(昭和39)年 ハーグのFID本部を訪ね、ワシントンのFID会議に出席。(社)日本ドクメンテーション協会(現・情報科学技術協会)会長。
- 1965(昭和40)年 太平洋学術会議を戦後初めて東京で開催、情報部門の委員長として参画。宮中にて皇太子殿下に御説明。ワシントンのFID会議出席。
- 1966(昭和41)年 日本博物館学会創立委員長。ハーグのFID会議出席。
- 1967(昭和42)年 日本物理教育学会会長。日本海事科学振興財団理事。ワシントンのFID総会に出席。
- 1968(昭和43)年 日本眼鏡学校長。文部省特定研究(科学教育)3期9年間主査。ハーグおよびワシントンのFID会議に出席。
- 1969(昭和44)年 ワシントンのFID会議に出席。
- 1970(昭和45)年 勲二等瑞宝章を授かる。ワシントン、イギリスおよびブエノスアイレスのFID会議に出席。
- 1971(昭和46)年 ソウルのFID/CAO会議に出席。
- 1972(昭和47)年 ブタペストのFID会議に出席。
- 1973(昭和48)年 「わが国における情報活動の推進に寄与」したとして日本科学技術情報センター丹羽賞受賞。ハーグ、ベルリン、ルクセンブルグおよびハワイのFID会議に出席。
- 1974(昭和49)年 ハーグのFID会議に出席。
- 1976(昭和51)年 ハーグ、メキシコ(FID総会)およびバンコクのFID/CAO会議に出席。
- 1977(昭和52)年 日本科学教育学会会長。日本のローマ字社理事。日本医薬情報センター理事。国際医学情報センター評議員。化学情報協会監事。国立科学博物館協会理事。文部省特定研究(言語)1期主査、2期・3期(現在)総括班員。パリ、ドイツおよびソウルのFID会議に出席。
- 1980(昭和55)年 イギリスおよびパリのFID会議に出席。
- 1982(昭和57)年 ホンコンのFID/CAO総会に出席。
- 1983(昭和58)年 ジャカルタのFID/CAO総会に出席。
- 1986(昭和61)年 物理教育国際会議組織委員長。バンコクのFID/CAO総会に出席。
- 1987(昭和62)年 トリアでのターミノロジー・知識工学の国際会議に出席。
- 1988(昭和63)年 北京のFID/CAO第10回総会に出席。日中科学技術用語集編集契約。
5月 専門用語研究会誕生し、初代会長となる。
- 1989(平成元年)年 ローマ字会理事長。
- 1990(平成2)年 11月日本医科大学で大腸ガン手術。応用光研理事長を退任。
- 1994(平成6)年 心筋梗塞のため日本医科大学に入院、肺炎のため死去(5月31日)享年95才

追 悼 録

大塚先生は幅広い活動をされましたので、いろいろな所で追悼の記事が掲載されております。今まで分った範囲内で記すと、次の通りです。

- 大塚明郎先生を偲んで. 大塚明郎先生追悼記念会（科学教育関係を中心として）
今堀宏三氏ほか37名 1994. 7
- 尾中龍猛. 大塚先生を偲ぶ. 物理学会誌. Vol.49, No.10, p.850
- 明専会報, Vol.705. 大塚先生追悼号
弔辞：中村孝
思い出：新莊謹一, 定石昭夫, 片山一彦, 木原敏夫, 溝尻貞雄, 藤田哲也
- NRS Rizityo Ootuka-Haruo o okuru. Romazi no Nippon 492Go,1994 6gat 1nt.
- 大塚明郎先生. Hokkaido Romazikenkyu.
- 今堀宏三. 大塚明郎先生の旅立ちを悼む. 科学教育研究レター. No.103. 1994. 6 .10.
- 斉藤和男. 大塚明郎先生の逝去を悼む. 情報管理. Vol.37, No 5 ,369p. (1994. 8)
- 大塚明郎氏を偲んで. 情報の科学と技術. Vol.44, No 8 . (1994. 8)
権藤卓也, 中村幸雄, 中村重男
- 巻頭. 大塚先生を偲ぶ. 分光学会誌. Vol.43, No. 5 . (1994.10)
- 京城帝大同窓会誌. 紺碧.
- 追悼特集－大塚明郎先生を偲ぶ. 物理教育学会誌. Vol.42, No. 4 . (1994)
下田光一, 大橋秀雄, 柏木聞吉, 唐木宏, 牛島一郎, 藤井清.

大塚明郎先生と学術用語の制定・普及

学術情報センター 青戸 邦夫
(元 文部省学術調査官)

大塚明郎先生との出会いは、昭和26年9月開催の学術奨励審議会学術用語分科審議会の調整部会に電気用語委員として出席された先生と、私は学術用語制定事業を担当する立場で同席して、熱伝導率【物理学】・熱伝導度【電気工学】・熱伝導係数【機械工学】を総合調整して「熱伝導率」に統一したときでした。

昭和27年7月に学術用語分科審議会は、(1)外来語・外国語の表記、(2)英語語尾の長音符号、(3)術語のかな書きと送りがなの3項目の学術用語の表記の問題点について、国語審議会に意見を求めました。当時、国語審議会委員の大塚先生は、国語審議会では術語部会とローマ字調査分科審議会とに分属して、「学術用語の表記について(回答)」(昭和27年12月18日国語審議会)の回答案の作成と「ローマ字つづり方の単一化について(建議)」(昭和28年3月12日国語審議会)の調査審議とに当られました。

後に、学術用語の表記についてのこの回答が契機となり、「外来語の表記」(平成3年6月28日内閣告示第2号)が定められました。

また、ローマ字書きについては、「ローマ字のつづり方」(昭和29年12月9日内閣告示第1号)が定められ、これに基づいて規定される「ローマ字による学術用語の書き表し方」(昭和49年1月文部省大学学術局情報図書館課)によって、『学術用語集』では用語の読み方をいわゆる訓令式で記しています。この書き表し方の作成に際しては、大塚先生にも原案をお目に掛けて御意見を伺いました。

『学術用語集』を利用する外国人留学生にとっては、ヘボン式になじみがありますが、訓令式をヘボン式に改めよとの根強い声もありますが、法令上で国としてそれができないことは、やむを得ません。一方、1989(平成元)年9月にISO3602“Documentation—Romanization of Japanese (Kana script)”が、DIS3602でヘボン式であったものを大塚先生のお骨折りで訓令式に修正の上で、成立しました。これで日本語のローマ字表記の国際標準化問題に結着が付けられました。

大塚先生は、『学術用語集』シリーズの編集・刊行に数多くの御功績を残されました。物理学編(初版)には日本物理学会用語委員として用語の選定に参加され、昭和32年10月から昭和47年7月まで、学術用語分科審議会の分光学用語専門部会主査となり分光学編の編集・刊行に当られました。昭和44年9月から昭和47年7月まで、学術審議会学術用語分科会の「物理学・化学系の調整委員会」の委員長として、関連分野間の用語の総合調整に当たられました。その後、学術用語分科会の運営委員会に理学部門を代表する主査委員として関与されて、図書館学編・論理学編・キリスト教学編・計測工学編・天文学編・化学編(増訂版)・遺伝学編・地震学編・歯学編・気象学編・原子力工学編・海洋学編・地理学編の学術用語の審査に、82才の御高齢まで当たられました。

昭和55年2月に日本物理教育学会(会長大塚明郎)は『学術用語集物理学編』(初版)の改訂方の要望書を文部省に提出し、大塚先生の手を経てその書面を私がお預りした。その後、同学会編『物理教育用語集』(昭和59年8月)が刊行されて、本書の用語が物理学編(増訂版)に記載されて、その要望にこたえております。

(財)日本科学協会評議員の大塚先生は、同会の学術図書作成及び配布事業によって、筑波大学学術情報センターの学術用語データベースに基づいて『学術用語集』の理工学関係25編(約12万語)を

集大成の上、昭和63年5月に出版された『学術用語集集成』の成立に尽力された。監修委員長大塚明郎、監修委員に中山和彦、野村雅昭の両先生とともに私も名を連ねた本書は、学術用語の研究及び科学文化の興隆に寄与しております。

昭和63年6月に大塚先生他の方々の肝入りで専門用語研究会が発足し、私は設立当初からの会員で大塚会長には特に御厚誼をいただいた。研究会のシンポジウムでは、「学術用語制定の経過」(第1回)、「外来語か訳語? — 学術用語の標準化における選択 —」(第5回)と題してお話する機会を与えられました。

第5回シンポジウムで外来語の表記を巡るこれまでの学術用語の整理・統一の経緯についての講演を終えて演壇を降りた折に、大塚会長から“御苦労様”の一言をいただいた。大塚先生とは40年前に国語審議会委員として外来語の表記の問題に取り組みされて以来の間柄で、そのお言葉は脳裡から消え去りません。

大塚明郎先生から長年にわたり御指導・御鞭撻を賜ったことに対し感謝し、ここに生前の御功績をたたえて、心から御冥福をお祈りします。

大器大塚会長を偲ぶ

ほどす 'かっぱ' 情報研究所 川島 勝

「先ほど大塚という方から電話がありました。川島さんから送られた資料、確かに受け取りました、とのお礼の電話でした」。1980年代、私が(株)荏原製作所資料室長当時のことで、部下の女性司書からのこの報告を私は心から嬉しく聞いた。

大塚会長との出会いは、日本ドキュメンテーション協会（現情報科学技術協会）主催の集会であり、同協会会長として初めてお目にかかったときから、私のような30歳も年下の者には、慈父のごとく親しみと優しさを感じさせる存在だった。

お送りした資料は、私が国立国会図書館の「びぶろす」33巻10号（1982）巻頭に書いた小文「専門図書館員として生きる喜び」だったと思う。電話で好意的な感想を述べておられた由と記憶する。

国家公務員時代、官房長や事務次官等、多忙な要職にある方ほど、図書館側からの情報サービスに対して礼儀正しく応答、配慮（他館からの借用などのとき）される姿勢に教えられ、さすが偉くなる人は小事にも忠実なのかと感心したりもした。わが国の現在の風潮は、著者に発表資料の送付を希望し、郵送してもらっても、受領通知もせず、まして礼状を直ちに送るなどそんな習慣があることなぞ関知しないようなときに、大先生からいただいた冒頭の電話は、私を喜ばせたのである。

ことしの情報科学技術協会新年賀詞交換会で、私は伯父の川島活寿が百一歳まで元気に生きた話をし、先生もどうぞますますお元気で百歳をお迎えくださいと祈りを込めて語ったことを思い出す。

専門用語研究会ができたとき、先生が会長に就任されているのを知って、中学時代、将来の希望に言語学者を夢みていた私は、積極的に参加したのであった。数年前、神奈川県資料室研究会から「人を動かす英語のノウハウ」と題して藤沢市民会館で講演をしてほしいと依頼され、ことばに関するものでもあるので、先生にもその記録をお渡ししたことがあったが、いつか伺いたかった先生のコメントを、聴けずにお別れしなければならないとは。この正月にあのようにお元気なお姿に接しられたのに、かえすがえすも惜別の情が募る。

この5月から「専門用語研究」編集委員に加えていただくことになり、少しでも会のお役に立ちたいと願って決意し、先生の御指導を更に身近に受けられるかと期待した矢先の御永眠。奥様はじめ御遺族の上に御慰めを心よりお祈り申し上げます。

大塚先生とローマ字表記

文教大学 太田 泰弘

告別式での柴田先生のご弔辞にあるように、大塚先生は熱心なローマ字運動家でした。1989年9月に制定された国際規格「ISO 3602 Documentation-Romanization of Japanese (Kana script)」は、最終投票の直前までアメリカが提案したヘボン式が優勢でありました。そのときまで、日本はいまいな態度を取り続けていました。ローマ字化が必要なのは外国なのだから、彼らが良いと思った方式を採用すればよいではないかというあなたまかせの意見もありましたし、1954年12月の公示された内閣訓令第1号には訓令式とヘボン式とが併記されており、その後30年たっても両方式が併用されているという現実重視の意見もありました。私の意見は後者でした。

先生は私の意見を手厳しく叱責されました。長文にわたる先生のコメントに従って、あらためて内閣訓令第1号を読みましたら、「国際的關係その他従来慣例をにわかに改めがたい事情にある場合に限り、第2表に掲げたつづり方（ヘボン式）によってもさしつかえない」という記述がみつかりました。先生によれば、第1表は臨時ローマ字調査会による1930年以後の慎重な審議の成果であり、第2表はアメリカ軍の占領によってやむをえず収載した暫定的なもので、時期をみて訓令式に一本化することを前提とするものだったのです。先生が日本政府を通じて諸外国にどのように働きかけられたのか、くわしくうかがう機会を失いましたが、英語圏は別として、他の言語圏は訓令式のほうが筋が通っていると理解し、日本の修正提案に賛成しました。しかし、制定直前の変更ですから、かなり強引であったと思われます。

国際規格制定後でも、外務省やJRはあいかわらずヘボン式を採用したままで、「ISO 3602による表記」と注記した官庁文書を見たことがありません。従来慣例をにわかに改めがたいという口実は国際的には通用しにくく、ISOで主張したことは実行せねばなりません。日本政府は建て前だけを押し通したとなじられても仕方がないことで、先生も政府の対応にかなりご不満のようでした。ちなみに、私はできるだけ国際規格できめられた表記法を使用するようこころがけておりますが、先生のご遺志にそうまでには、まだかなり時間がかかりそうです。

OWAKARE NO KOTOBA

Ootuka Sensei !

Ootuka Sensei wa watakusi ni totte titioya no yō na sonzai desita. Watakusi no kanai mo, titioya ni sessuru yō na kimoti o motte orimasu. Tosikakkō mo sō desu ga, naniyori kokoro no tūziau koto kara itte sō desita. Watakusitati wa ima sanninme no titioya to wakarenakute wa narimasen.

Watakusi to Ootuka Sensei to wa sanbon no hutoi ito de musubarete imasita. Dono ito mo kotoba ni kankei no aru ito desu.

Ippon wa, Rōmazi Undō desu. Ootuka Sensei to wa itido mo rōmaziron o tatakawaseta koto wa arimasen desita ga, onazi kokorozasi o motu mono to site musubarete imasita.

Rōmazi Undō ni totte gyakuhū no huku naka o, konniti made Nippon-no-Rōmazi-Sya no Rizityō to site taihen na ohoneori desita.

Toku ni ōkina osigoto wa, ISO, Kokusai-Hyōzyunka-Kikō de, Nihongo no kokusaiteki na rōmazi hyōzyun hyōki ga Amerika kara teian saretā Hebonsiki ni kimarikaketa toki, Ootuka Sensei wa karada o hatte tekkaī sase, Kunreisiki Rōmazi o saiyo saseru no ni seikō sita koto desita. ISO ni dasu gen'anzukuri ni, Sensei no goirai de, Kusakabe Humio Si to sannin de, Nihonbasi no hurui biru no, ōkina issitu de ikuban mo sugosita koto o omoidasimasu.

Itu no tosi datta ka, Nippon-no-Rōmazi-Sya no bōnenkai no ori ni, magao de "ato o yorosiku tanomimasu yo" to ossyatta koto ga atama o hanaremasen. Kitto ōku no hito ni onazi messezi o okutte orareta no da to omoimasu. Rōmazi Undō no tomosibi o kesu na to iu tuyoi okimoti datta to omoimasu.

Nihonme no ito wa, Monbusyō no Kagaku Kenkyūhi ni yoru Tokutei Kenkyū desu. 1976nen ni Sensei o syusa to site hazimatta Tokutei Kenkyū "Gengo" kara "Gengo no Hyōzyunka", tuide "Gengo Zhōhō Syori

no Kōdoka" ga owaru 1985nen made, kazoekirenai kazu no atumari de itumo Sensei to dōseki simasita. Sensei wa tada no ikkai mo kesseki saremasen desita. Kore wa odorokubeki koto de, mazu kenkō ga hosyō sarete iru koto, kimame de aru koto, gokazoku nado mawari ga heian de aru koto nado, ii zyōken ga sorotte inakereba dekinai koto desu. Kitto kō sita atumari e no syusseki ga Sensei ni hodoyoi titeki sigeki ni nari, mata, karui sanpo ni natte, 95sai no tyōzyu o mattō sareta no da to omoimasu.

Sate, sanbonme no ito wa Senmon Yōgo desu. Dō sita wake ka, Tokutei Kenkyū ga hazimaru zutto izen kara, Monbusyō no Gakuzyutu Yōgo Iinkai de onazi iin to site dōseki suru koto ga sibasiba arimasita. Soko de otagai ni dasu iken ga myō ni itti site, iinkai no kettei ni eikyō o ataeta koto ga arimasu.

Saikin wa, gakuzyutu yōgo o hukumeta Senmon Yōgo no zenkokuteki na sosiki "Senmon Yōgo Kenkyūkai" ga deki, Sensei wa konniti made sono kenkyūkai no Kaityō o tutomeremasita. Kono 3nen hodo wa watakusi mo yakuin no hitori to site, maikai kao o awasete orimasita. Koko de mo Sensei wa kaikin, itido mo yasumareta koto wa arimasen desita. Kotosi 4gt. 12nt. ga iinkai syusseki saigo no hi ni natte simaimasita.

Ootuka Sensei wa, hito mo siru heavy-smoker desita. Tabako no gai ga ōgoe de sakebareru zidai ni natte mo, doko huku kaze ka to ki ni kakerareru yōsu wa ukagaemasen desita. Kaigi ga owatte minna tatisatte mo, Ootuka Sensei ga doko ni irasita ka wa itimoku ryōzen desita. Suigara ga ōkina yama ni natte iru haizara ga mezirusi desita. Ootuka Sensei ni totte wa, tabako wa gai ni naru dokoro ka, genki no minamoto no hitotu dattarō to omoimasu. Tada, Sensei no tonari no seki ni suwaru koto ga yoku arimasita ga, sono toki wa itu mo kazakami no seki o erande kemuri o sakemasita. Sikasi, Sensei wa

itido mo hito o kemuri ni maku yō na koto wa arimasen desita.

Ki o tukete imasitara, Sensei no suigara no yama wa nennen tiisaku narimasita. Tyotto sabisii omoi o site orimasita ga, sono saigo no tabako no kemuri ga kieru yōni, Sensei wa, watakusitati no mae kara kiete simawaremasita.

Watakusi no kanai ni kakawaru koto mo tukekuwaesasete itadakimasu to, Ootuka Sensei ga Tōkyō Teikoku Daigaku o sotugyō site saisyō no huninsaki ga Nagoya no Dai 8 Kōtō Gakkō desita. Sosite, dōryō datta gihu no ie ni dōkyō nasaimasita. Desu kara, kanai wa, 2-3sai no koro kara no Ootuka Tyentyee na no desu.

Kono 4gt. 10ka no hi ni, gosinzoku o tyūsin to suru 95sai no tanzō pātī ga ari, watakusitati hūhu mo tokubetu no gosyōtai o ukemasita. Sono toki, Sensei wa maiku no mae ni tuttatte dōdō no supīti desita. Konna ni ogenki da kara, kono tugi wa Hakuzyu no oiwai ka na to omotte orimasita no ni, kono hi ga Sensei ni oai sita saigo ni narimasita.

Ootuka Sensei !

Dōka goyukkuri oyasumi kudasai. Sosite, dare habakaru koto naku tabako ni hi o otuke kudasai.

1994nen 6gatu 3ka

Sibata Takesi

(専門用語研究No.7より再録)

大塚先生を偲んで

愛知淑徳大学 田中 康仁

“大塚先生の家族の皆様へ”という手紙を書き御送りしましたので、その全部をもって偲んであげたいと思います。

平成6年7月5日

大塚先生の家族の皆様へ

愛知淑徳大学
教授 田中 康仁

昨日（7月4日）大塚先生が天寿を全うされたことを専門用語研究会の会報で知り、名古屋は文化の届かない所と思っています。それにしても残念なことだとも思います。皆さまの落胆は大変なものだとお察しいたします。ここに謹んで哀悼の意を表します。

私のことは余りご記憶にないかと思いますが、以前、県立姫路短期大学に勤務していました。その当時、文部省の科学研究費のグループで大塚先生と一緒に何度か話したこととか、九州の吉田将先生が私の博士論文の主査であったこととかで、何かみじかな先生とっていました。九州の帰り道に姫路に寄られ、白鷺城にご一緒したことがつい最近のこの様に思い出されます。また、オーストリアのウインやドイツに行くことを仲本、太田、長山さんが計画を立てていた時、大塚先生はどうしようかといったので、私が鞆持ちをしましょう、先生にも伝えましょうと言いました。3人とも私がなぜ大塚先生を知っているのか分からないためびっくりしていました。先生もお年だったので、皆さん心配されたのだと思います。私にとっても秘書役としての良い経験でした。写真も撮りましたので先生も喜んでいらっしたと思います。

私の父も生きていれば94才です。先生に失礼をかえりみず、“前世紀の遺物ですね”と申したことがあります。私の父より一歳年上なので明治32年生れだということも思い出します。

先生が天国に行かれても先生の業績と教えをさらに発展させたいと考えています。

先生、家族のみなさんと、私たちを見守って下さい。では、天国で安らかにお眠り下さい。私の思い出より!!

大塚文子さんから次のような返信をいただきましたのでそれものせます。

平成6年7月12日

田中康仁様

このたびはご丁重にお手紙とご香典を御送り下さいましてありがとうございました。早

速靈前に供えさせていただきました。

父は1990年に大腸がんになり手術をし、麻酔がききすぎて、一時は頭がおかしくなってしまうかと思いましたが、1週間で覚め、その後ずっと順調で長いこと元気で過ごして居りました。5月23日突然胸の痛みを訴え、救急車で病院へ運ばれわずか1週間で旅立ってしまいました。田中さんのことは白鷺城は勿論のこと、特にウィーン旅行では大変お世話になりよく覚えております。あの時は父の初めての団体旅行でもあり、高齢のため健康診断書を提出することにひどく不満をもらしていたのが思い出されます。

科学教育、物理教育、専門用語等々、多くの若い方々が頑張っておられるので安心して天寿を全うできたのだと思います。どうもありがとうございました。

大塚先生と一緒に旅行して感じたことは次のようなことがあります。

- ① ドイツのマックスウェル研究所で若いころすごされたせいか、ドイツの衛生観念がよくしみこんでいるようでした。
食べ物は熱を通したものでなければいけないというような考えがみられました。なまものは食べないようでした。これは胃腸には良かったのではないかと思います。
- ② 食べ物では脂肪分を少なくおさえ、動物性蛋白質を多く取られていたのではないかと思います。ハム、ソーセージ、肉…等を好んで食べられていたように思います。これは血管を強くし、長生きされたのだと思います。
- ③ 95才まで生きられたのは精神的に強い人であったのだと思います。何事も基本を重視し、論理的に考えることをしていたのだと思います。又、あまり古い話しや昔の思い出にはふれない人だったようにも感じられました。
- ④ ドイツの公衆電話から東京の自宅に電話をかけるのをお手つだいた時、電話の後で、誰と話されたのですかと聞くと、「妻（さい）だよ」、私にとっては何か分らないでいると少し笑っていたので、ようやく誰れと話したか分かりました。奥様を愛されていたようすが、ほんの少しのことからも判りました。

私にとっても生き方として参考になることばかりでした。

ポラニーとの出逢い

IRIS研究所 仲本秀四郎

ミハエル・ポラニーは、1891年ハンガリー生まれ、17才でブダペスト大学医学部に入学、22才で医学博士になり、1914年には第1次欧州大戦に軍医として従軍した。そのころから化学の論文を書きはじめ、1923年アンモニア合成で有名なハーバーの研究所に入所した。かれの化学の研究では、吸着のポテンシャル理論、X線回析と結晶および化学反応論と、現在でも有効な際立って優れた成果を数多く発表している。ナチスに追われてイギリスに移住、ノーベル賞受賞を目前に1948年、突然、化学者としての活動を停止し、以降、科学哲学者に転じた。渡米して1976年に亡くなるが、医者から化学者、哲学者と多彩な経歴を形成し、「少なくとも39の大きな貢献ないし発見をなし、200を超える科学論文を発表する」¹⁾などの研究業績を残した。かれの人となりや業績、劣らず著名な兄弟・家族の発展など、多くの書に紹介されている。

化学反応論の最初の研究は「希釈炎による反応研究」で、この独創的な見事な実験を行ったのは共同研究者大塚明郎先生である。¹⁾ 1927年、在外研究員に命じられた先生は西川正治教授に奨められて、²⁾ ベルリンのポラニーのところへ赴く。ポラニーの許には大塚先生を先頭に、堀内寿郎（北大）、児玉信次郎（京大）、玉虫文一（東大）の諸教授が学ぶが、いずれも化学専攻であるのに、大塚先生だけが物理学者であるのは興味深い。当時、量子力学の発展期で、ディラック、ウィグナー、マイトナー、ハイトラー、ロンドンなど多くの物理学者の事績がポラニーとの交流に現れる。大塚先生の実験の内容²⁾はここでは省くが、1930年までに4報告を発表、2報告はポラニーとの連名で、ノーベル賞受賞者ヒンシェルウッドの教科書にも引用された。²⁾ 3年後に同研究室を訪ねた堀内教授は「大塚博士の一挙手一投足にはすべて意味があった」という研究助手たちの賞賛を聞かされる。¹⁾

哲学に転身したポラニーは、「意味と言語にかかわる視点から科学的発見を位置づける（栗本慎一郎）」¹⁾ 立場をとり、発見をコミュニケーションの過程と考えて、独自の言語理論の展開を図る。既に研究室を去られて久しかったが、大塚先生のその後の活動に大きな影響を与えたのは疑いない。先生はいう、ポラニーとの出会いは1920年代後期の数年で形の上では終わったが、かれに根ざした考え方に私は支配されている。「もしポラニーに出逢わなかったら、成果の大小はともかく、質的に変わった私もなかったと思われる」と締めくくられた。¹⁾

- 1) 大塚明郎, 栗本慎一郎, 慶伊富長, 児玉信次郎, 廣田鋼蔵. 創発の暗黙知—マイケル・ポラニー—その哲学と科学. 青玄社.1987.
- 2) 大塚明郎. 私の歩んだ研究と情報の道 —多くの人と協力して— 情報の科学と技術, Vol. 33, No.12, P655—663. 情報科学技術協会 1988.

追記 1987年7月8日、長山泰介氏と高橋正美氏のきもいりで鎌倉で開かれた大塚先生の米寿のお祝いの席で、先生からベルリン留学中のお話をうかがった。登場する近代物理学の碩学の名前がなつかしく、特にポラニーの研究室での事績が非常に興味をそそられた。伝聞ばかりの内容で恐縮だが、印象がきわめて強かった。それが、追悼文として執筆の動機である。

大塚先生を悼む

日本医業情報センター 長山 泰介

大塚先生と知り合ったのは、私が情報関係の仕事で日本原子力研究所で始めた頃、当時のUDC協会を通してですから、もう40年近くになりましょうか。困ったことが起ると、相談にのっていただきました。

普段は無口で、地味な大塚先生の一番颯爽とした姿が思い浮ぶのは、海外旅行をご一緒にした時です。1965年（昭和40年）FIDの国際会議に先生は出席され、科学技術庁が組織した情報機械化調査団の団長として関連機関をご一緒しました。私も団員の一人として参加し、私にとっては初めての海外旅行でした。当時私は原研で情報担当でしたが、先生はわざわざ私のために原研の研究所長を訪問し、情報活動の必要性を説いて下さいました。原研では情報部門からの海外出張は当時むづかしかったのですが、大塚先生のおかげで、団員に加えていただき、今でも大変有難かったと思っております。大塚先生は煙草をくゆらすとうまい英語がでてくるようで、団長さんに皆が通訳をやっていたいておりました。

1987年（昭和62年）のターミノロジーと知識工学の国際会議にご一緒したことも強く印象に残っております。大塚先生は88才というご高令、十数名のチームで旅行しましたが、お元氣なのはビックリ致しました。日本に帰って反省会を開いた時に、日本にもターミノロジーの核を作ろうという先生の願いが専門用語研究会の誕生へとつながりました。そして翌年5月に研究会が発足し、満場一致で初代の会長になっていただいたわけです。

大塚先生は人目に立つようなことはあまりお好きでなかったようです。1987年（昭和62年）に有志で米寿のお祝をしたいと申し出ましたら、お断りということでした。しかし少人数で記念の座談会をするならということで二十名ばかりの少人数に限られましたが、有志の会を開きました。この時大塚先生はご自分の歩まれた道を話されました。この時の記録は“情報の科学と技術” Vol.138, No.12に掲載されております。

大塚先生は奥様に言わせると無趣味でしてといわれますが、勉強が趣味とも一致し、生涯現役という大変お幸せな生涯を送られ、なまけ心の多い私はお手本にしたいと思っている所です。

大塚先生はヘビースモーカー、91才で腸のポリープの手術をされたあと、しばらくは手持無沙汰のようでしたが、やがて煙草は復活しました。煙草がよほど性に合っていたのかも知れませんが、ヘビースモーカーぶりを見ていると、健康には余り関心をお持ちでないように見えますが、食べもの、運動など、結構気をつけておられたようです。それよりもご家族の健康への支えが大きかったのではないかと思います。

90才を過ぎても、積極的な意欲は常にあり、これが健康の秘訣だったのかも知れませんが。専門用語研究会の会合には休んだことはありませんでした。時々夜の会合もあり、お帰りが心配で、家の方向が同じ私が新宿までは一緒しましたが、何等心配はありませんでした。それでも体の調子が悪い時でしょうか、車で帰られたり、家族の方が迎えに見えたりして、理想的な健康管理をされていると感じました。

先生は逝くなる前まで本屋さんに電話をかけてはよく読書されていたようです。5月の末に逝くなられましたが、6月の会合予定まで手帳には示してあったそうです。

先生の生れは1899年、ご自分で前世紀の遺物といっておられ、何とか100才まで三世紀を生き抜いていただけたらと残念な気もします。100才の壁は仲々きびしいようです。私のお手本にしたい先生の生き方、あやかって行きたいと思っております。安らかに眠り下さい。 合掌。

専門用語研究 第8号サブリメント

大塚明郎会長を偲ぶ

(1994年10月31日発行)

専門用語研究会

〒102 東京都千代田区一番町4-6

一番町中央ビル2F

日本総合技術研究所 (JIST) 内

Tel. 03-3262-8956

Fax. 03-3262-8960